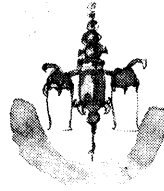


保育のあしたのために

— 学生の意識を中心に —



土 屋 と く

およそ、教育の場においてすべてのものに先行して考えられねばならないのは「人を得る」ということであろう。

職場でそれぞれの職責に適した人間を求めるのは当然のことであるが、からだと心のやわはだに触れる数々の経験が、その後の成長の素地とも芽ともなりうる幼児期を担当する保育者の場合は、よき人の確保がより真剣に要求されねばならない。

たとえ現在の施設が理想に及ばない状態にあるとしても、真に子どもを愛し教育の目標に向かってしっかりとした見通しをもち日々の保育に当たることの出来る人を得ているなら、その園は幼児との間に流れるあたたかい心の交流が多く、ものを補って、おのずから創意と工夫が随所に生まれ独自のあたたかい

ふんいきが子どもたちを生き生きと成長させていつているに違いない。

近來米国で、膨大な資金を投入して新しい幼児教育の学習、普及がいろいろな形で実施されているようだが、それらの報告をみる時、いずれの方法の場合でも、つまるところ成功、不成功のかきは、幼児のしあわせに焦点をしっかりと合わせて保育をすすめていく現場の人たちがすぐれた能力の持主であるか否かにかかっているように感じられる。

いま我が国においても幼児教育の重要性がようやく声高く叫ばれ、過去のどの時代よりも多くの試みや拡充がなされようとしている。

新しい時代の教育改革がいかに理想を高く掲げようとも、それを具現していけるすぐれた人間の存在無くしては、しよせんその目的を達することはおぼつかない。

よき保育者の育成と確保がいままで以上に強く望まれ、養成機関の一層の充実と質的向上への努力が積み重ねられねばならないであろう。

しかし「人を育てる人を、育てる」この問題は幼児に関心をもつすべての人々が知恵を出し合い力を合わせて考えていってこそ現実の課題解決になるはずである。最も直接的な影響を受ける子どもからの発言としても「よき保育者満てよ」と声を大にして願わずにはいられない。

学生の意識

現在保育者の教育機関としては大学・短大・養成所等があるが、各学校で学生はそれぞれ一般教養と専門両面にわたる科目の修得を終え現場に向かうことになる。幼児関係の科を志望し入学してくる以上、将来の進路についてある程度の意志決定をしてくるのであるが、現実にはその意識がどれほどのものか、またどう変容して行くか公立・私立の養成所（二年制）の学生にいくつかの問題を出してみた。

調査対象は入学後三ヵ月経った時点での一年生数十名ずつである。

まず第一に「なぜこの学校にはいったか」についてきいてみた。その結果

- A 幼児教育に使命を感じて
- B 子どもが好きだから
- C なんとなく
- D 人にすすめられて
- E ほかに行くところが無かったから
- F 一生の仕事を得るため
- G 宗教的関係から

に大きく分類された表 1・2 参照

・分類項目は、単独よりも二つの組合せが多かったので、両者の関係と分布がみやすいように表では横と縦に A、B、C をとった。

・パーセンテージは多答式を考慮して（A の中には AB、AG が含まれる）各項目の集計を群ごとの総解答数で割ったものである。

・ゴシックの数字は重複されたものを示す。

I 群での動機は単独では B「子どもが好きだから」というものが一番多く、ついで AB「子どもが好きだし幼児教育に使命を感じて」という組合せ、さらに BD「子どもが好きであり人

動 機 の 分 布 と 組 合 わ せ

表1 I 群

| 公 立 保 育 養 成 所 | | A | B | C | D | E | F | G | 計 | % |
|---------------|---|---|----|---|---|---|---|---|----|------|
| 幼児教育に使命感を感じて | A | 3 | 9 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 14 | 19.4 |
| 子どもが好きだから | B | 9 | 12 | 4 | 5 | 4 | 4 | 0 | 38 | 52.8 |
| 何 と な く | C | | 4 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 4 | 5.6 |
| ひとにすすめられて | D | | 5 | | 0 | 0 | 0 | 0 | 5 | 6.9 |
| ほかに行くところが無かった | E | 2 | 4 | | | 1 | 0 | 0 | 7 | 9.7 |
| 一生の仕事を得るため | F | | 4 | | | | 0 | 0 | 4 | 5.6 |
| 宗教的な関係から | G | | | | | | | 0 | 0 | 0 |

表2 II 群

| 私 立 保 育 養 成 所 | | A | B | C | D | E | F | G | 計 | % |
|---------------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|------|
| 幼児教育に使命感を感じて | A | 7 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 | 5 | 17 | 35.4 |
| 子どもが好きだから | B | 1 | 1 | 1 | 2 | 1 | 0 | 0 | 6 | 12.5 |
| 何 と な く | C | | 1 | 6 | 0 | 0 | 0 | 0 | 7 | 14.6 |
| ひとにすすめられて | D | 1 | 2 | | 0 | 1 | 0 | 1 | 5 | 10.4 |
| ほかに行くところが無かった | E | 1 | 1 | | 1 | 0 | 1 | 0 | 4 | 8.3 |
| 一生の仕事を得るため | F | 2 | | | | 1 | 0 | 0 | 3 | 6.3 |
| 宗教的な関係から | G | 5 | | | 1 | | | 0 | 6 | 12.5 |

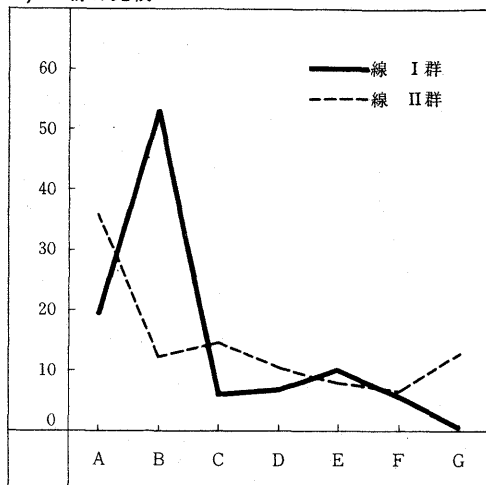
◆ %は解答に対する割合

にすすめられたから”というのが続いている。

Ⅱ群では単独でA “使命を感じて” というものが多くC “何となく” というものも多くみられる。三番目に宗教的な動機と幼児教育に使命を感じての組合せAGが目立つ。

両群間の各項パーセンテージを比べてみると(グラフ)のようになり両者の相異がはつきりするようである。I群すなわち公立の保育養成所の学生が “子どもが好きだから” この学校を

I, Ⅱ群の比較



選んだと答えているのが圧倒的であるのに対し、Ⅱ群の私立の養成所ではこれがぐっと少なく、 “幼児教育に使命を……” の方が高くなっている。この学校がミッシェンであり伝統をもっていることがそうさせているのであろうか。

第二の質問 “幼児をかわいと思うか” ではI群の全員つまり一〇〇%がかわいと思うと答えている。そして、とても、とっても、もちろん、大変、幼児が大好きですというような最大級の表現をそえている。またこの仕事をする決めてから一層かわいと思うようになった—生意気なところもあるがとても—子どもの中にはいりたい—と述べている者もあった。これらはみな動機の結果と矛盾しない。

Ⅱ群の大半も同じように—純粹だから—自然のかわいさ—なんともいえない—小さい子を見るとどうしようもないくらい—と心から幼児をかわいと言っているが数名の者はいささか否定的な感想をもらしている。

—時と場合により違う—生意気な子はきらい—思う子とかわない子がいる—時々面倒に思うことがある—そういう気持はあまりない、ただ神の存在を知らしめたい—等々。一問との関連をみると、動機がやや薄弱なものにこうした傾向が強いようだ。

二つの機関での相異をみて公私立によってこうした傾向が現われると即断するのは大変危険であろう。各校の特色が生徒の質を決めることは確かかもしれないが、今回のものは調査としては不完全なもので、もっと厳密な設問、多数の対象、在学年数、そして同じものを何回かやってみなければ明確な判断は下せない。ともあれ各養成機関にはいつてくる大部分の者が子ども好きであり、幼児教育の重要性を自覚して情熱を傾けようとしていることが十分にうかがわれたのはうれしい。

こうした人々をいかに理想的な保育者になし得るかが教師の責任になるわけだが、一方何となく入学したと答え、子どもを好きと思わないと言う人たちの意識をどう変容させ得るかというところ、これらもとても大切なことであり、また大変興味をそえられることもある。

意識の変化と実践

入学後意識が変化したことを示した例にこんなものがあつた。最初はまだ子どもが好きで入学し、授業もおもしろくなかったが次第に幼児教育に対する使命感を感じ始め、勉強そのものも大変楽しくよい道に進んだと思つてゐる。

○幼児教育の大切さが次第にわかつてきて、とてもおもしろくやりがいのある仕事だと思う。

○入学した時は軽い気持ちだったが、勉強するにしたがつてむずかしさがわかりこわくなつてきた。はたしてやっていけるか不安である。

それぞれ正直な感想であり、進歩ととらえたい。学生の時ではなく実際の保育にあたるようになってからも、前者のような喜びと後者の不安は交互におとずれ経験されるものである。そしてこのいれかわる心境の相互関係が保育を育てることにもなるのである。

意識を変容させるものは何といつても現場での経験だと思う。養成中最も効果があるのは見学であり実習で、学生も非常に喜ぶものだ。現場の中から問題を見つけ、教室に帰つて討議し理解を深める。そしてまた以前より一層ひらかれた新たな目で現場に臨む、毎日直接子どもに接している先生方のお話も生きていて訴える力は強い。

そういう過程の中でこそ幼児についての理解は深められ、保育の何たるかを知ってくるのである。およそ育ての心ははたのぬくもりを通してでなければ本当のものにはなり得ない。最良の教師は子どもそのものにほかならないからである。

実践を通して学ぶということがもともと重視され優先されてもよいように思うであろう。理論がとかく上すべりになりがちなのも、これで随分効果をあげ得ると思う。

また必要を感じながらも各種の現実的な障害にはばまれ、実行に移されない例が多いのは残念なことだ。

概念くずしと柔軟性

私は時々学生にクイズを出すことにしている。ここに示すものもその一つである。

- ● ● 問 上に九つの点がある。この点すべてを四本の直線で一筆書きに結んでごらんない。
- ● ● 制限時間 五分

この問題に対しては四苦八苦する者が大半だが（ちょっとやってみてください）中には文庫本等で解答を知っていて簡単に解いてとくとしてゐる者も出る。時間がきれるとがっかりしている者にも得意の者にも頭脳の明晰さを競わせたわけでないことを告げる。もちろん解けるにこしたことはないし知能とはこういった性質のものともいえるが、ここでは概念くずしの一つの説明として適当だから使うのである。

解答がわかれば何のことはない「アアコンナコトカ」とあほ

らしくなるし、なぜ気がつかなかったのだろうと臆（おそ）をかむ思いにかられるらしい。しかし人間はあるワクの中の考えとか物の見方から、なかなか外に出ることが出来ない不器用さをもった動物であるらしいのだ。いったんこうと思ひこんでしまうとそれを変えるのは容易でない場合が多いし、現在の環境の中に安住していると自分から回りにワクをはめこんでそこからたくなに出ようとしなくなる。

一歩外にふみ出して物を考えること、今の方法だけでなくもっとほかに道があるのではないかと、あらゆる角度から検討を加えられることが現代人に要求される資質の一つとなると思うが、学生たちにこのことを知らしめるためにもこんなクイズは役に立ち、意識の変容を望ましい方向に向けるにもプラスになる。

柔軟性がなくなるということは、すなわち老いたことだそうである。無限の可能性を秘めて成長していく子どもたちと取組む者たちは、皆いつまでも老いてはならないのだ。

保育者養成の期間は短い。この中で学ぶべきことはかぎりなく多く、指導する者の力は微々たるものといわねばならない。要求されるもの多く、時も場もかぎりあるとすれば、与え得るものとしては将来に向かって思考し行動する基盤となる方向づ

けと、問題に対処する姿勢を身につけさせることだと思う。末
しょう的な知識のら列でお茶を濁したところで進歩し変化する
現実に対処していく力は育たない。

そしてこれさえしっかり身につけることが出来れば、あとは
毎日の保育をすすめながらいくらかでも勉強を要求される保育で
あるから、余力はなかなか見いだせないだろうが、きびしくて
もそれが一番必要な、かつ正しい方法なのだと思う。上に立つ
方々は、保育者の研究時間ねん出にできるだけ留意していただ
くことをお願いしたい。

変動期にさしかかっている教育界の動きは多少の混乱をとも
なうて迫って来よう。朝の子どもたちのため、保育の明日を実
り多いものにするため、我々は手をつないで力強く進んでいき
たい。

